

近代の西洋人による中国語研究と原典コレクション

Western studies of the Chinese language (全15点)

国際コミュニケーション学部准教授 塩山 正純

愛知大学図書館では、昨年度末に文科省の補助を得て、近代の西洋人による中国語研究関連の原典コレクションを購入し、本学図書館の関連蔵書が大いに充実しました。これを機会に、近代西洋人による中国語研究史の研究と、本コレクションについて簡単に紹介したいと思います。

近代中国における西学東漸は、西洋文明・文化受容の過程であり、東西間の言語文化接触の影響を抜きにしては語れません。そして、来華キリスト教宣教師の「英華・華英字書類の編纂」、「中国語研究書」、「聖書の中国語訳」に代表されるように、中国語に「文化の受容と語彙の創造」の面で大きな影響をもたらし、中国語研究にも大きな成果を残しました。

近年、近代中国における東西言語文化接触に関する研究が国内外で盛んになりつつあります。近代西洋人による中国語研究の著作は、現在の中国語研究においても、中国域外の周辺資料のひとつとしてとくに重視されていますが、それには幾つか理由があります。まず欧州では早くから言語学・文学が確立していたこと、非母語話者が客観的に記述していること、アルファベットで中国語音を記録していること、そして研究者の多くが基督教宣教師であり彼らが中国語の官話と方言を明確に区別して認識していたこと、などが挙げられます。

国内では1950年代にはすでに香坂順一、太田辰夫、尾崎實の各氏らにより欧州資料を用いた研究が始められていました。最近になって漸くこうした周辺資料による近代中国語の研究が重視されるようになり、例えば、関西大学の内田慶市教授のグループがCOEで、近代中国語研究資料データベースの構築に取り組

んだりしています。海外でも、中国は北京外大の張西平教授、ドイツはエアランゲン大学のラックナー教授、イタリアはローマのマシーニ教授などのグループが、同様に精力的な研究活動を展開しています。

愛知大学では、このような派手な研究活動はないものの、ライヒマン文庫をはじめ、欧米の近代中国研究の文献を多数収集してきました。近代中国語関係の蔵書は充実しているとは言えませんでした。荒川清秀先生が近代日中学術用語の形成と伝播、故那須雅之先生がロブシャイトの字典を研究テーマとされ、筆者も西洋人の近代中国語研究をテーマとしていることから、中国語訳聖書の原典から、字典、中国語文法書まで、原典資料の収集をこつこつと続けてきました。そして、現在では、近代西洋人による中国語研究の著作の原典を系統的に所蔵する数少ない大学図書館のひとつになっているといえます。例えば中国語研究書だけでも、以下のように18、19世紀の重要な著作が揃っています。

- 1) *Linguae Sinarum Mandarinicae Hieroglyphicae Grammatica Duplex*
(中国官話 Fourmont, 1742)
- 2) *Elements of Chinese Grammar*
(中国言法 Marshman, 1814)
- 3) *A Grammar of The Chinese Language*
(通用漢言之法 Morrison, 1815)
- 4) *Elements de la Grammaire Chinoise*
(Remusat, 1822)
- 5) *Arte China* (漢字文法 Goncalves, 1829)
ゴンサルベス 1829
Vocabularium Latino-Sinicum
(辣丁中国話本 Goncalves, 1836)
- 6) *Esop's Fables Written in Chinese by The Learned Mun Mooy Seen-Shang*
(意拾喻言 Thom, 1840)

そこに今回の新規コレクションが加わったというわけです。本コレクションはこれまで集めてきた資料に比べて、一つ一つはやや地味であることは否めませんが、既存の蔵書の空白を埋めて全体をより充実させる重要な役割を持っています。ここからは新規コレクション(全15点)の代表的なものを紹介しましょう。

まず、A Historical Essay Endeavoring A Probability That The Language of The Empire of China in The Primitive Language (Webb 1669) は中国語を通時的に記述したエッセー集で、西洋人による中国語研究で1600年代の資料は、愛大これまでに集めていなかったものです。

つぎに、Linguae Sinicae(1831) はリプリントですが、これで18世紀初期の中国語研究の重要な資料のひとつであるプレマールの著作、Notitia linguae sinicae(1720)が加わりました。

Miscellaneous Pieces Relating to The Chinese(Thomas Percy 1762) は中国語に関する種々の事象について記述したものです。

Dissertation on The Characters and Sounds of The Chinese Language(1809) は、マーシュマンの中国語の文字と音声に関する研究書で、大著『中国言法』の出版前段階の重要な著作の1つです。

A View of China(1817) と Chinese Miscellany(1825) はいずれも、初めて聖書全文の中国語訳を完成したモリソンによる中国に関する概論と文字の概説書で、その中国語研究のうちでも有名かつ重要な著作です。

Grammatica Latina(辣丁字文1828) はポルトガル人宣教師ゴンサルベスの、中国語によるラテン語文法書で、ラテン語中国語対訳の会話練習部分は当時の口頭語の重要な資料です。

Lexicon Magnum Latino-Sinicum(辣丁中華合字典1851) も同じくゴンサルベスの著作で、こちらはラテン語中国語辞書です。このほか、豊橋図書館はすでにArte China(漢字文法1829) と Vocabularium Latino-Sinicum(辣丁中国話本1836) を所蔵しています。

Chinese Chrestomathy in The Canton Dialect(1841) はブリッジマンによる広東語教本ですが、その内容は中国の民俗、階層、商務、産業、芸術、地理、動植物、薬学、政治など多岐にわたります。中国語の学習にとどまらず、中国に関する概説書としての価値が高い資料です。

Notices on Chinese Grammar(1842) はギュツラフによる中国語文法書で、これも19世紀における西洋人による中国語研究の重要資料の1つに数えられています。

An English and Chinese Vocabulary, in The Court Dialect(英華韻府歴階1844) はウィリアムズによる英漢辞書です。ウィリアムズはまたモリソンの聖書全文の中国語訳の協力者としても知られています。

最後に、The Peking syllabary(Wade 1859) は19世紀後半の中国語研究の大家であるウェードの著作で、北京官話の音声を記述したものです。アヘン戦争を経て、当時は中国国内では南京官話から北京官話へとその優位性がシフトした時代です。ウェードには『語言自邇集』という有名な官話教科書がありますが、ちなみにその初版は世界における稀観本です。かつて本学の荒川清秀先生が所蔵しておられましたが、「よりこの資料を役立てられるひとのところにあるべきだ」と言ってその元本のひとつである『尋津録』と合わせて、ある研究者に譲られたというエピソードがあります。

以上が本コレクションのあらましですが、この全15点によって、近代中国語研究の原典資料コレクションは一段と充実しました。国内の大学図書館で、これだけまとまって所蔵しているのは稀なことで、西洋人による近代中国語研究関連著書のコレクションは、豊橋図書館の特徴のひとつになりつつあると言えます。

また、本コレクションは当時の欧米人による中国学、中国語研究の系統的な系譜を研究するための基礎文献であるばかりでなく、宗教(キリスト教)や語誌(西洋文化の受容)といった周縁分野での学際的な利用の可能性も大いにあることを付け加えておきます。